

不登校対応は、はじめの1週間がカギ

「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省）では、30日以上欠席を不登校として定義しています。しかし、実際には30日の欠席のある児童生徒は、はじめの数日間の欠席理由に加え、学習の遅れや生活習慣の乱れといった新たな課題を抱えてしまい、欠席が長期化することが多くなります。

不登校対策は、はじめの1週間がカギです。次の4つの取組を学校全体で行い、新たな不登校を出さないための援助を行いましょ。

○ 欠席したら夕方には電話連絡、2日続いたら家庭訪問を

保護者から「かぜで休ませます」という連絡があったとしても、欠席には、その他にも理由があるかもしれません。電話や家庭訪問を通した「大丈夫？」の一言が、子どもを救うきっかけになります。家庭訪問では、本人に会えなくても、保護者と話すだけでも大きな意味があります。欠席が3日続いたら、その状況を、養護教諭や管理職と共有しましょ。

○ 断続的な欠席でも、「理解シート」の作成を

児童生徒が、休みがちだったり教室での様子に変化が見られたりするときには、早めに「理解シート」（資料Ⅰ）を作成しましょ。シートを作成することで、気づかなかった子どもの姿が見えることもあります。

作成したシートは、援助チームで共有しましょ。また、必要に応じて適宜更新し、進級、進学の際には生徒指導の記録として引継ぎましょ。

○ 困っている児童生徒に不安を感じたら「援助チームシート」でチーム援助を

困っている児童生徒に援助を行える担任、コーディネーター、保護者、学年主任、SC、SSWなどが集まって、「援助チームシート」（資料Ⅱ）を使って、児童生徒の状況を共有し、具体的な援助をいつまでに誰が行うか相談しましょ。相談する時間は、はじめはきちんと時間をとって相談します。慣れてきたら15分から20分の短時間でも効果的です。援助のための会議を、定期的に関き、困っている児童生徒に必要な援助を続けましょ。

○ 定期的なアンケート調査などで、学級の中の児童生徒の状況把握を

いじめアンケートや「SOSチェックリスト」（資料Ⅲ）やQ-Uなどを利用して、学級集団の状況や児童生徒一人一人の状況を的確に把握しましょ。（資料Ⅴ参照）アンケートなどにより、困っている状況を見つけたら、まずは、本人に「大丈夫？」という声をかけましょ。多くの子どもは「大丈夫です。」と答えるかもしれませんが、本当に大丈夫であれば、アンケートには書きません。よく話を聞きましょ。

☆ 生活の乱れが深刻になる前に ☆

休みがちになる原因の一つに、生活習慣の乱れがあります。「生活&睡眠振り返りシート」（資料Ⅳ）を使って、生活の見直しを図ってみてはどうでしょうか。本人が記録することが難しい場合には、保護者に記入してもらっても構いません。

ネットゲームやSNSなどによるインターネットの利用が過剰な場合には、いわゆる「ネット依存」（資料Ⅵ参照）かもしれません。「生活&睡眠振り返りシート」を、本人、保護者と一緒に見直すことで、本人に生活の乱れを自覚させ、改善したいと思えるように促しましょ。

